

私学の魂

成城中学・高等学校

「知・仁・勇」の理念を受け継ぐ 伝統ある男子教育を礎に 131年目のスタートを切った成城中・高の グローバル時代の新たなリーダー教育

1885（明治18）年に「文武講習館」として設立され、陸軍士官学校への予備教育を施すエリート校として、創立以来の「社会に有為な人材を育成する」精神を受け継いできた成城中学・高等学校。

2015年1月に、さらなる“文武両道”の実践を可能にする新校舎を完成させ、新宿牛込という、新宿副都心にもほど近い交通至便な地で、創立から131年目の新たなスタートを切りました。東京都心部の男子進学校として、中学入試でも2年続きで高い人気を集めているその理由はどこにあるのでしょうか。

今回は、一昨年2013年4月からこの成城中学・高等学校の校長に着任し、現在に至る学校改革のリーダーシップをとる栗原卯田子先生と、入試広報室長の宮本八太郎先生にお話を伺いました。



校長の栗原卯田子先生

DATA

1

成城中学・高等学校

- 沿革 1885（明治18）年 「文武講習館」として、京橋区（現中央区）築地に創立。
1886（明治19）年 「成城学校」と改称し、幼年科、青年科を設置、陸軍士官学校・幼年学校への予備教育を施す。
1891（明治24）年 宮内省より牛込区原町（新宿区原町）の現校地を下賜され移転。
1918（大正07）年 日本で初めての林間学校を長野県中房温泉で開設。
1925（大正14）年 成城第二中学校を分離、別財団とし、北多摩郡砧村（現世田谷区成城）に移転（後に成城学園となる）
日本で初めての臨海学校を神奈川県逗子市初声村に開設。
2005（平成17）年 創立120周年を迎える。
2012（平成24）年 新校舎（現1号館）竣工。
2014（平成26）年 新校舎（現2号館）竣工。
2015（平成27）年 1月、人工芝グラウンド・サブグラウンド竣工。創立130年。

校長 栗原 卯田子

所在地 〒162-8670 東京都新宿区原町3-87
TEL：03-3341-6141
<http://www.seijogakko.ed.jp/>

交通 都営地下鉄大江戸線「牛込柳町」西口出口より徒歩1分

“成城流リーダー教育”のひとつの柱、今年90年目を迎えた臨海学校

1885年に「文武講習館」の名で創立された成城中学・高等学校は、今春1月15日に創立130周年を迎えました。その記念事業の一環としてこの2015年1月には新校舎も完成。そうした成城の教育史の新ページが始まる節目に、栗原卯田子先生が2013年4月、同校の校長に着任しました。

栗原先生は、長らく都立高校の教育現場で多様な経験を積み、2004年に校長昇任。都立高校改革推進計画のもとで2006年度に都立高校の閉校を担当した後、東京都立小石川中等教育学校の校長として、2012年度までの6年間、小石川の中等教育学校への改編を推進してきた先生です。

小柄ながら果敢な判断力とエネルギーな行動力で、都立小石川の特色である「国際理解教育」と「理数教育」の新たなプログラムを実現してきた栗原先生は、公立学校から私立学校へと移ったいま、男子校である成城中学・高等学校の未来に大きな可能性を感じているといいます。

「成城は130年もの歴史のある、私学らしさをもった男子校です。明治の創立期から敗戦を経て、その間、様々な存立の危機や苦勞を乗り越えて現在を迎えています。私自身はこの成城に特別なご縁があったわけはありませんが、成城の教育の礎を築いた第9代校長の澤柳政太郎先生（成城学園の創立者でもある）は、都立小石川高校の初代校長であった伊藤長七先生をバックアップしていた方だったと、後でその歴史的なつながりを知りました」と語る栗原先生は、自身が成城中学・高等学校の校長に迎えられた不思議なご縁を感じているそうです。

「成城は陸軍士官の予備学校として設立されましたが、澤柳先生の理念は、単なる軍人教育ではなく、成城ならではの「リーダー教育」で、それが今日まで本校に受け継がれる伝統をつくってきたと感じています。その象徴が、今年で90周年を迎えた本校の臨海学校です」と栗原先生。

中学1年生全員240～270名を対象に毎年7月に行われる臨海学校には、教員40～50名に加えて、各クラブから選抜された高校2年生約40～50名が「補助員」として参加します。泳ぎの指導の補助だけではなく、船の出し入れやブイの設置など様々な業務をこなします。中学1年生の命を守り、彼らに思い出深い臨海学校を体験してもらえるよう力強く働く補助員たちの姿は、中学1年生の憧れの存在となり、彼らの



90年の歴史を持つ臨海学校では各クラブから選抜された高2の「補助員」が中1の水泳指導その他をサポートする。

成長のためのお手本、ロールモデルとなっています。

昨年の臨海学校で上級班の班長を務めた高3の生徒はこう語っています。

「今年の遠泳は天候が悪く、水温がかなり低かったのですが、全員で円陣を組み、士気を高めて挑みました。遠泳を終えて、浜に上がっていく時の喜びは言葉では表せません。後輩たちをここまで成長させ、1時間40分の遠泳を泳ぎ切らせることができたことをとても誇りに思いました。後輩たちは、やればできる子たち。彼らの成長の過程に自分が関わったこと、ともに遠泳ができたことを誇りに思います」（T・Mくん）

これが、伝統として受け継がれる成城流リーダー教育のひとつの柱である臨海学校で、初めてこれに参加する中学生と「補助員」として参加した高校生がともに得ることのできる「中高6年間一貫教育」ならではの貴重な経験です。

「補助員の高校生が実に格好良いのですよ。それぞれの部活でリーダーシップをとってきた高2の先輩は、中1の新入生からすると、とても頼れる先輩で、しかも先生よりも身近な兄貴的な存在です。彼らと一緒に、苦しい遠泳も乗り切ることができた経験を、自分が先輩になったときには次の後輩たちにさせてあげたいという思いが、90年間も脈々と受け継がれてきたことはすごいことだと思います。また、この臨海学校は細部にわたるマニュアルがなく、多くが口伝で受け継がれ、自然に根付いています。こういう面も、まさに男子校らしい伝統だと思っています」と楽しそうに栗原先生は教えてくれました。

成城中学・高等学校が、創立時から大切にしてきた「ノブレス・オブリージュ（=高貴なる者には義務が伴う）」の精神を育てる教育が、すでに90年も前から臨海学校でも実践されてきたということなのでしょう。

次世代リーダーの育成のための、“成城流”グローバル教育

そして、伝統ある“成城流リーダー教育”を次世代のリーダー育成のために進化させつつある、もうひとつの柱がグローバル教育です。

栗原先生が着任した年から導入し、今年で3年目を迎えた「エンパワーメント・プログラム」は、中3から高2の生徒を対象に、カリフォルニア大学の学生10数名を招いて、1日6時間、5日間の国内研修を通して、自己啓発・自己実現を促すプログラムです。

アメリカの大学生と共に議論を重ね、多様な文化を持つ人々と協働しながら、自分の意見を論理的に表現し、問題を解決に導く力を養うこのプログラムは、今後のグローバルな社会で生きる生徒たちの「未来を作る力」を育てるものです。

「このエンパワーメント・プログラムはわずか5日間のプログラムですが、実施後の冬にこのプログラムを経験した本校生徒達が自主的にカリフォルニアへ足を運び、自分達でカリフォルニア大学を訪問するなど、驚くほどの変容が見受けられました。男子校ならではの新たな成果と感じています」と栗原先生。

海外の名門大学の学生の学ぶ姿勢に触れ、良い意味で触発された生徒たちは、その後何事にも積極的に取り組むようになるといいます。



次世代リーダー育成のための成城の新たなグローバル教育のひとつがエンパワーメントプログラム（中3～高2）

そして栗原先生は、さらに成城の教育を充実させるために、持ち前の行動力と決断力で矢継ぎ早に新たなプログラムを導入し、実践しようとしています。

それが、今年度から同校のオリジナルプランでスタートしたオーストラリア研修です。クィーンズランド州政府にも協力を要請し、希望者を対象に実施するこのプログラムでは、「自分が参加したくなる気持ちを大切に、伸びようとする芽を育てていきたいと思っています」と栗原先生。

「小石川中等教育学校でも1人1家庭へのホームステイ、全員参加で2週間の語学研修を行いました。成城では、英語を活用した、成城流の次世代リーダー育成のためのプログラムとしてさらに工夫するつもり



授業中にはメリハリの利いた態度で集中し、先生との対話が繰り返される。

です。きっと生徒達は”大化け”すると思っています」と海外プログラムの進化を図る栗原先生。

「そういう意味では、この先、成城では英語教育が大きく変化していくと思います。今回のオーストラリア研修に英語科からは2名が同行しました。また、9月からJETプログラムによる補助教員が配置されました。生徒の成長や手ごたえを英語科の視点からもしっかり見守っていくことができます」と栗原先生。

こうした英語教育の進化・発展によって、5年後の「2020年大学入試改革」で、英語の4技能（読む・書く・聞く・話す）がすべて重視され、民間の英語検定が大学入試にも導入されることになっても、きっと成城の生徒は十分に対応できるということなのでしょう。

現在の小学生が大学を卒業して社会に出る2025年以降には、オリンピック後の東京を中心に日本の社会はさらにグローバル化すると予想されます。その先の時代を担い、そこで活躍するためには、英語によるコミュニケーション能力は必須です。

ややもすると英語を話すことに照れてしまいがちな年代の男子生徒だからこそ、女子の目を気にすることなく、男子だけの環境で「のびのびと英語を練習できる」ことのメリットは大きいはずで。

多様な子どもたちの個性と能力を伸ばし、偏差値を超える大きな成長を促す！

長らく東京の都立高校の教育現場で、へき地や島にある高校、職業高校、閉校予定の高校から小石川中等教育学校をはじめとする進学校まで、様々な地域にある、様々なタイプの高校での教員、教頭、校長の経験をしてきた栗原先生だからこそ、この成城中学・高等学校が持っている良さを感じ、その強みを生かした教育のビジョンを描くことができるという面もあるので

しょう。

「成城に来た当初は、男子校の校長を女性が務めるのはやりにくいかな等、そういう質問をされることもありました。でも、そういう心配はまったくなかったですね。女性である私や、生徒の母親の目から見て、頼もしくて格好良い男子を育てる教育ができるなんて素敵ではないですか（笑）。

それに成城には以前から良い先生が大勢いて、そういう先生方と合う生徒が入学してきてくれます。中学入試のレベルでも、成績の最上位層ではなくて、上位から中位まで、最も受験生の多いボリュームゾーンの生徒が入学してきてくれることが素晴らしいと思います。偏差値の高さではなく、いろいろな個性を持った子どもたちが集まってくれるからです。そういう子どもたちの個性と能力を伸ばす教育をしていけることが、この成城の大きな魅力だと考えています。とくに男の子は、高2くらいからぐんぐん伸びていきますから…、そういう男子の成長を中高通して見ていけることが楽しみです」と、男子の中高一貫校ならではの特質と



運動部・文化部とも盛んなのが成城の特色。授業の後の大きな楽しみだ。

利点を栗原先生は語ります。しかも現在の成城中学校の入試におけるポジショニングにも、かえって大きな可能性を感じているようです。

この数年、男子校のなかでも「面倒見が良い」という評価が受験生や入学者の保護者の間で高まっている成城中学・高等学校。この点が同校の人気の理由であることは間違いありません。

そのうえ2014年には新校舎が竣工し、人工芝のグラウンドなどを含めたキャンパスリニューアルが完成したことで、さらに注目され、中学入試でも2年続きで大きな人気を集めています。

「中学に入学してきた当初は、学力的にもアンバランスな生徒が多くいることは確かです。数学（算数）の計算力はあっても、基礎的な理解ができていない子とか…。ですから、中1の最初の頃は、基礎から徹底して面倒を見て、しっかりとした学習習慣を身につけさせることに重点を置いています。始めから『自学自習しなさい』といっても、できる子ばかりではありませんから。

でも、そうした学習姿勢ができてきたならば、やがて自主的に学習していけるよう導いていきます。この

点でも、成城では学年の担任団がほぼ持ち上がりで生徒を見守り育てていけることが大きいですね。とにかく、中高の6年間で、何度も失敗を経験させて、自らその失敗を次に生かせる力を育てていくことが大切だと考えています」と栗原先生は言います。

男子の教育は、焦らずじっくりと生徒一人ひとりの可能性を信じて、親や教員が傍らで失敗や成長を見守りながら育てていく大らかさや“距離感”が大事だということは、男子教育の経験豊かな先生方の間では共通認識になっています。それができることが、この成城中学・高等学校の中高6年間の最大の魅力なのかもしれません。

「教育環境が整ったことも利点です。学習施設はもちろんなのですが、成長期で力の余っている男子が、休み時間や放課後に思い切り身体を動かしたり遊んだりできるスペースのゆとりができたことが嬉しいですね」と栗原先生。

「施設面では、体育館とは別に、広くて冷暖房が完備された地下体育室もあり、全面人工芝化した全天候型グラウンド、サブグラウンド、プール、図書館、コンピュータ教室、イングリッシュルーム、自修館（自習室）カフェテリアなど、いずれもとても居心地の好い、恵まれた環境と施設です。様々なタイプの生徒がいますが、それぞれ、居場所を見つけていると思います」と栗原先生。

さらに成城では、いつも職員室に大勢の男子生徒の



正門を入ると右手にサブグラウンド。校舎の奥には広い人工芝グラウンドがある。



自修館（自習室）は朝7時半から19時まで開室し、放課後は常駐するチューターが生徒の学習をサポートしてくれる。



職員室は成城の生徒と先生がコミュニケーションをとる「対話の場」。

姿が見られるのも特色のひとつです。同校では生徒とのコミュニケーションを重んじ、対話を通して生徒を指導していく独自の文化が根付いています。

「実は私も成城の卒業生なのですが、昔から本校は、教員と生徒の距離が近いというか、先生に対して、勉強のことや進路のことはもちろん、いろいろなことを相談できる兄貴的な親近感を抱いていました。そういう雰囲気はいまも変わっていないですね」と、入試広報室長の宮本八太郎先生も言います。

職員室には全学年の教員がひとつの職員室内にいて、各学年に生徒と対面できるカウンターが設置されています。さらにテーブルと椅子を備えた質問コーナーや、周囲の視線を気にせず相談できる面談室も4室設置されていて、休み時間や放課後には大勢の生徒が職員室を訪れるそうです。

男子が最も成長する中高生の時期に、親とは別に、身近に何でも相談できる先生の存在があったことは、後になってみるととても有難かったと多くの男子校のOBは言います。この成城中学・高等学校には、そうした伝統も、また変わらずに受け継がれているようです。

変わらぬ「知・仁・勇」の理念のもと 爽やかに、のびやかに、大きく育て 成城健児

取材に訪れたこの日は、午後の授業から放課後になる時間帯の校内の様子を見学させていただきました。

見せていただいたのは6時間目の授業でしたが、熱の入った講義をする先生の姿勢に答えるように、自然体で授業に前のめりで集中している生徒の様子が印象的でした。ところが教室に取材で足を踏み入れると、教室内の男子が一斉に挨拶してくれます。そして一転、また授業に集中します。そのメリハリのある切り替えの素早さは、爽やかさと同時に、未来の社会で活躍する紳士教育の成果も感じさせてくれるものでした。

休み時間にも、廊下ですれ違う多くの男子生徒が明るく挨拶をしてくれて、通りすがりに栗原校長先生や宮本先生が声をかけると、屈託のない受け答えをしてから元気に歩き去っていきます。そんなところにも、現在の成城の活気ある伸びやかな校風が感じられました。

美術室では、美術系大学への進学を希望する高校3年生が2人で、デッサンの習作に取り組んでいました。また好天に恵まれた屋上では、建築系の進路を希望する高3生が4人、新宿の都心部だからこそ眺めることのできる近隣の建物を選んで、建築物のスケッチに励んでいまし



屋上では建築系の進路を希望する高3生が、近隣の建築物をスケッチ。

た。そうした高校生が、各自の希望する進路に挑戦していこうとする姿に、栗原先生と宮本先生は笑顔で温かな眼差しを向けていました。

「この成城には、リーダーとして育つ何かがあると思っています。ですから入学した生徒たちには、この6年間で



高3の美術の授業では、各自の進路に合わせて必要な課題に取り組む。

各自がやりたいことをすべてやって、大きく成長してほしいと願っています」と伸び盛りの男子の成長に大きな期待を寄せる栗原先生。

日本の近代国家形成に大きくかかわってきた成城では、創立以来「知・仁・勇」を教育理念とし、それぞれの時代において「知・仁・勇」を備えた男子のリーダー育成をめざしてきました。

その「知・仁・勇」を栗原先生は、日本がグローバル化を向かえたいま、「知＝確かな知識、教養、賢明な知性」、「仁＝思いやりの心、チームワークを得意とする柔軟さ」、「勇＝いかなる困難な課題にも果敢に挑戦する勇氣、前例なき課題に挑戦する強靱な力」と表現し、これからの時代に貢献する賢明（知）、柔軟（仁）、強靱（勇）なリーダーの資質だと強調します。

そういう伝統を持つ成城には、「校訓」や「学習十五則」を礎とする「授業第一主義」や「自学自習」など、堅実な校風があります。勉学と部活動等とを両立させる「文武両道主義」の伝統も創立以来です。こうした伝統ある男子教育を軸にして、一人ひとりの生徒に基礎・基本をきちんと身に付けさせ、確かな学力、思いやりの心、逞しい体力を育て、生徒の希望する進路実現をめざしていることはいまでもありません。

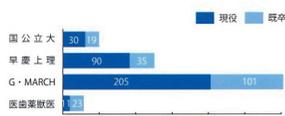
ただし、新たなグローバル時代には、その時代に求められる新たな教育も必要です。そこで、一昨年度から新たな教育の柱として加えられたのが、先の「成城版グローバル教育」の展開なのです。

将来の進路や職業を考え、それにつながる大学や学部を選びきっかけになる機会を、今後さらに増やしていきたいと栗原先生はいます。

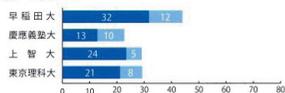
「オーストラリアの海外研修では、シドニーオリンピックのアスリート達が利用した施設に泊まり、リーダーシップ研修を体験しました。その後はホームステイをベースにしながら、TRIという、名門大学医学部、病院、企業、政府が提携して運営する最先端医療研究所を訪ねて遺伝子組み換えに係わる実験の一部を体験したり、さらにクィーンズランド大学では、模擬講義を受講したりしました。こういう学問やビジネスの最先端につながる場面を見せてもらうと、生徒は驚くほど前向きな良い反応を見せてくれます。今後さらにこうした機会を工夫して生み出していけば、生徒はより成長し多方面の進路に巣立っていけると確信しています」と栗原先生。

現在、全国各地に設置されている公立中高一貫校のなかでも高い人気を集めている都立小石川中等教育学校。その母体校である名門高校と中等教育学校を併設

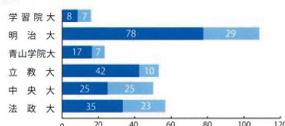
平成27年
主要大学の合格状況(卒業生251名)



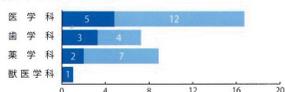
▶ 早慶上理



▶ G・MARCH



▶ 医歯薬獣医学科



現役合格率 80.9%	現役進学率 72.5%
早稲田・慶應 67名(現役45名)	国公立大学 49名(現役30名)
医学部医学科 17名(現役5名)	上智大学 29名(現役24名) 明治大学 107名(現役78名) 立教大学 52名(現役42名) *過去最高

平成27年 指定校推薦

大学	推薦枠	進学名
早稲田大	4	4
慶應義塾大	1	1
上智大	3	2
同志社大	2	1
東京理科大	5	1
学習院大	7	1
明治大	2	1
青山学院大	3	2
立教大	3	2
中央大	7	4
法政大	1	0
医学部医学科	3	0
歯学部歯学科	8	0
薬学部薬学科	5	0
その他63大学	287	0
合計 89 大学	340	18

しながら一貫校として完成するまでを、校長として責任を持ってリードしてきた栗原卯田子先生の教育に対する情熱は、この成城中学・高等学校の校長に着任してからも、さらに高まっている印象です。

「これまで経験してきた学校ではいずれも、実現したいと考えていたことが苦勞しながらもなんとかできてきました。そしてこの成城では、そうした公立学校とはまた違った、男子校としての新たな教育が実現できるのではないかと考えています。その手ごたえも十分に感じています。まだこの先、どんどん進化していけると思います」と語る栗原先生は、いまも毎朝、登校してくる男子生徒を校門で出迎えるといいます。

その成長の可能性を信じて、真新しい校舎に入っていく後ろ姿を温かく見守る栗原先生の瞳の奥には、きっとこの先の社会で活躍する生徒の頼もしい将来像が映っているに違いありません。



廊下には理科や社会科の研究ポスターなど、生徒の学習成果が貼り出され、仲間の作品に良い刺激を受ける。



広い体育館はバレーボールなどの公式試合会場になることも多く、2階ギャラリーもある。